



論説 1

令和2年度 新型コロナウイルス禍における評価員を経験して

深 尾 秀 一（滋賀短期大学 副学長）

はじめに

私の所属する滋賀短期大学は、大正7年に大津市に設置された松村裁縫速進教授所を母体として昭和45年に開学、令和2年に50周年を迎えました。学園の創設者である中野富美の理想とすべき教育理念を表した「心技一如」の建学の精神を継承し、地域に貢献できる人材の育成に寄与し現在に至っています。どの大学、短期大学においてもこの建学の精神は重要なものであり、ぶれることない社会的責任を負っているといえます。しかし、恥ずかしながらこのことを真に理解できたのは、平成29年に初めて評価員となった時でした。第三者評価の評価員に参加させていただくまでは、学内の自己点検評価に携わっていましたが、部分的なところの点検のみでした。最初に評価員となりチーム責任者の方に非常に丁寧にご指導いただき評価を終えたときに、やっとこの外部評価の意味合いとその大切さを理解することができました。そしてその経験を活かし、その後は自学の自己点検評価に活かすことができるようになりました。

令和2年度は初めてチーム責任者に指名され、他学の先生方と評価員を務めることとなりました。しかし、新型コロナウイルスによる感染症対策のために、昨年度までの手順や手法とは違う形での評価活動となりました。評価校、評価員にとっても初めてのことが多く、手探り

で始まった評価となりました。ここではそれを振り返るとともに、認証評価面接調査の在り方について考えてみたいと思います。

評価の前段階

令和2年度における認証評価作業は、戸惑いからのスタートとなりました。というのもコロナ禍の評価という事で、まず、毎年東京にて行われる評価員研修会が開催されず、動画を視聴し研修を受けるというものに変更されたことでした。この事は、チームの半分以上が初めて評価員をされることもあり、チーム責任者としての重責を感じずにはいられませんでした。この時期には、学内では遠隔授業はすでに始まっていたものの、Zoomによるオンライン会議による評価方法については想像することが難しく、先が見えないことに不安を覚えていました。しかし、日程的には少し遅れましたが7月上旬には、評価員メンバーと連絡を取り合うことができ、7月下旬には評価校から書面調査のための資料が届き、書面調査に入ることとなりました。評価を始める時期が遅れたことや、感染症の影響で関係者の予定がはっきりしない中で、日程調整に関しては少々苦勞をいたしました。

8月上旬には基準協会から、ウェブサイトにおいて各要綱・規程・マニュアルなど、オンライン調査についての情報が示されました。各評

価員には、評価校からの書面調査前に必ず視聴してご理解いただくようお願いをさせていただきました。

オンライン会議を前に必要な、「確認・質問票」の作成や評価校からの回答を受けての評価員会議などの必要もありましたが、限られた日程と感染症による不測の事態も考慮に入れて予備日も念頭に、早め早めの日程を取り決めました。結果、評価校並びに評価員の皆様には申し訳なかったのですが、タイトなスケジュールとなっていました。

書面調査

7月下旬に送られてきた書面調査用の資料については、各評価員には全資料に目を通していただくことをお願いするとともに、評価委員の皆様のご経歴をもとに重点的に見ていただく個所の分担を決めさせていただきました。評価の流れは、書面調査から始まり、基準別評価まで、階層的に評価が行えるようになっていて非常に分かりやすいものとなっています。しかし、初めての評価員の皆様には、その説明が必要です。しかし、今回はその研修会がウェブサイトによる研修となったために、責任者として十分とは言えなかったかもしれませんが、電話やメールを通してご理解いただけるように努力をいたしました。

評価チームではメールでの情報共有を行いつつ書面調査を進めるとともに、確認・質問事項を整理し9月上旬（オンライン会議2週間前）に評価校のALOにお送りさせていただきました。その後すぐに評価校からご回答をいただきましたが、訪問調査ができないということもあり、評価校のALOには施設等についての動画を作成していただいたり、各地域における事業についての動画を編集していただいたりと、負担も多かったのではないかと思います。

しかし、振り返って考えると、訪問調査の代

わりに行われた、評価校とのオンライン会議を限られた時間内で進める重要なポイントは、「確認・質問票」によるこの確認・質問事項の精査でした。この確認・質問事項のやり取りの後、オンライン会議前に評価員会議をZoomで開催し、確認・質問事項を整理し、一旦、基準別評価票（案）まで作成をいたしました。

オンライン会議による面接調査

オンライン会議を実施する前には、事前に評価校とZoomを利用して一度会議を行いました。前日には万全を尽くすために再度Zoomを使用し、ネット環境の確認とともに、拝見させていただく備え付け資料の提示方法などの確認を行いました。

当日はオンライン会議の45分ほど前に、評価員だけで直前打ち合わせ会議を行い、最終的に確認・質問事項とその担当者を確認しました。オンライン会議は3ブロックに分け、10時から11時30分まで評価区分「Ⅰ-A / Ⅰ-B / Ⅰ-C / Ⅱ-A」について、12時30分から14時まで「Ⅱ-B / Ⅲ-A / Ⅲ-B / Ⅲ-C」について、14時30分から16時まで「Ⅲ-D / Ⅳ-A / Ⅳ-B / Ⅳ-C」について、オンライン会議を実施しました。各休憩時間には、簡単ですが評価員内での打ち合わせを行いました。オンライン会議終了後の16時から、当日の会議を踏まえて評価員会議を行い最終報告書作成について協議を行いました。

「本来の訪問調査の方が詳しくお話を聞けるのではないか」という不安もありましたが、理事長、学長をはじめ各教職員にはしっかりと時間調整をしてお出席いただき、書面調査では分かりえない教職員の熱意や詳細な資料についてもご説明をいただきました。

このオンライン会議の最後には、総評をチームリーダからお話をさせていただくこととなっていました。わたくし自身が得たものが多く、

これからの大学・短期大学の向かうべき姿を勉強させていただいたという思いを述べさせていただきました。

このオンライン会議の1週間後には「基準別評価票」を仕上げて出さねばならないのですが、今回は評価校に後日追加資料をお願いすることになってしまいました。それもまた評価校のALOには迅速に処理をしていただき無事に提出することができました。

おわりに

11月中旬には分科会が行われ、評価校についての意見交換がZoomを使用して行われました。チーム責任者だけが出席するにあたり、前日には再度「基準別調査票」、質問した事項や資料に目を通し、当日は机の横にすべての資料を配置して臨みました。分科会終了後は、評価員全員に無事終了したと御礼をお伝えしました。

令和2年度はオンライン会議という点で、今までの手法とは違った過程を踏んでの評価となりました。確かに、備付資料の確認や、動画では分かりえないかもしれない施設整備の評価、学生との意見交換や学内の雰囲気の把握など、難しい問題もあったと思います。しかし、その難しさゆえに、評価の過程で学ぶことも多かったのではと思います。評価の方法や手順はすでに基準協会がよく検討されたシステムですが、評価の観点の整理、重点的なポイントの洗い出しなど、今回の制限のある手法で苦心をしたことにより効率的に評価をすることができたことも確かです。また、評価員打ち合わせ会議や評価校ALOとの調整も、遠隔会議の導入で調整がしやすくなったといえます。

今後、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたとしても、基準協会には今年度培った手法を検証し、より良い評価過程を検討していただければと思っております。個人的には、オンライン会議と訪問調査の両方を利用し、訪問調査を1日にして時間的負担を減らし、調査の質を上げることを検討していく事が良いのではないかと考えます。

今は、2回目の評価員・チーム責任者の重責を終えてほっとしていると同時に、この認証評価というシステムの完成度の高さに感銘を受けています。個々の大学や短期大学の課題はあるものの、高等教育機関としてのあるべき姿の点検をこのシステムを利用し行うことにより、自己研鑽ができるものだと考えています。また、評価員に携わることにより、他校から学ぶことも多くあることは明白です。日々忙しく職務に追われる毎日ですが、一歩引いて自分の学校を見ることができました。

最後に、今回の評価活動に多大なご協力をいただいた評価員の皆様、評価校のALOをはじめとした皆様と、基準協会の方々に感謝し御礼を申し上げます。



滋賀短期大学玄関